

この夏のボクのバカンスは、共同連という障害者団体の全国集会への参加を口実にした仙台旅行で、塩釜漁港の鮎屋をはしごしてみたいと楽しみにしている。それだけではあまりに後ろめたいので、共同連が提唱している「社会的事業所」というものの、ボクなりの「新発見」を紹介することにした。

社会的事業所というのは、法定雇用と福祉作業所という障害者雇用のセオリーを超えた、いわば「第三の道」で、「ともに働く」という事業体のことだ。一応の目安を、障害者が25%以上働いていることとしている。法定雇用は1.8%だから障害者が「少なすぎ」、福祉作業所は「指導員」以外は障害者で、こちらは「多すぎ」で、どちらも自然体ではないというわけだ。また、「障害者」を「障害者など労働市場から排除された人たち」へと対象を広げていることも自然体に近い。ボクの「新発見」というのは、その25%のことではなく、75%の方で、つまり、社会的事業所は、障害者の3倍の「非障害者」雇用を実現する、「フル就業」時代を進取する新雇用戦略というところにある。

なんだ頓知問答かと一笑されるかもしれないが、ボクは、いたって真面目に考えている。つまり、ボクの中にある「福祉癖」を問い直しているわけだ。



福祉癖を問い直して、雇用を競う

どうも、ボク達は、障害者雇用だけに目を向けて、働くという全体の価値を語らない、いわば「福祉癖」にとりつかれてきたのではないか。そんなことから、社会的事業所を提案しても、「新手の福祉か」と疑いの眼で見られたり、「いまそれどころではない」と無視されてしまうのだ。25%ではなく75%の思考…騙されたと思って、秋の夜長、いろいろ思案してみたらどうか。ボクも、幾つかのアイデアが閃いてきたが、追々披瀝していきたい。

炭谷茂さん(元環境省事務次官)によれば、完全失業者350万人を含めて、労働市場から排除された人たちは2000万人と言う。また、福祉は嵩む一方なのに、働く人は減る一方で、早晚支えきれなくなるのは素人目にも明白。つまり、「完全雇用」で福祉を支える時代から、「フル就業」、フルすなわちすべての人が、就業すなわち雇われるだけではない多様な働き方で、社会を統合する時代へと変わらなくてはならないと思う。だから、ボク達は、「福祉癖」を直して、「社会的事業所で、雇用を競う」のだ。

さて、25%程の時間が集会で、75%程を鮎屋のはしごに費やす北の旅への夢で、熱帯夜もしばし忘れそうである、御免。

(編)ナイス代表取締役 冨田一幸



はなればなれに



脚・監：ジャン・リュック・ゴダール
 撮影：ラウル・クダール
 音楽：ミッシェル・ルグラン
 キャスト：アンナ・カリナ
 サミー・フレイ
 クロード・ブラスール
 製作：1964年フランス
 劇場公開：2001年モノクロ95分
 DVD発売：IMAGICA

北区神山町に「扇町ミュージアムスクエア (OMS)」(注1) という複合施設があった。若者文化の発信基地として、そして関西の演劇活動の先進的拠点として有名であった。ここには「コロキウム」というミニシアターがあり、僕はよく出入りした。

ゴダールは「気狂いピエロ」(なび3月号)を撮る前年の64年、本作品「はなればなれに」を演出した。ところが、この作品は日本では40年近く未公開のまま、やっと2001年に単館でロードショーされたのである。大阪では「コロキウム」のみの上映であったと記憶するが、言葉にはいい表せないぐらいキュートで、ちょっぴり情け知らずで、しかしのびのびした青春群像を描いていて、他を寄せつけないほど(今も!)瑞々しくゴダールをますます好きにさせた逸編であった。

青年2人が少女をたぶらかし、少女の叔

母の財産を狙うという単純なあらすじだが、この映画の特色は他のゴダール作品に比べ、ストーリーが分かりやすい点だ。しかも、ストーリーよりディティールに愛おしさとおしゃれセンスがちりばめられていて魅力的なのだ。青年アルチュールとフランツが、ビリー・ザ・キッドを話題にして、街頭で打ち合う真似ごとをしながらゴロゴロ倒れるシーン、英語学校のシェクスピアの講義中、アルチュールが席を越えてオディール(カリナ)に延々ラブレターを書きよこすシーン、そして圧巻は「シエルプールの雨傘」のテーマが流れる中、金を盗む密議がはかどらず「1分間沈黙しよう」といって、その瞬間、映画は1分間無声状態になってしまうシーン。このあとジュークボックスから流れる音楽によって3人が踊るのがこの映画の白眉で、ずっと大切にしておきたいほどカッコよく素晴らしいシーンなのである(ジュークボックスといえば、「女と男のいる舗道」<62年>でもアンナ・カリナの踊るシーンがあった)。傑作なのが、9分45秒間でルーブル美術館を見学した青年がいたという話題をしたあと、3人はルーブルに押し入り、9分43秒という最速で美術館をひと回りする有名なシーンだ。これはおそらく館内での隠し撮りが効を奏し、出演者たちも緊張感を味わいながら楽しんだことが伝わってくる。これらはテーマに関係なくいわば青年たちの風景として挿入され、監督自身の遊びとして付き合わされるのである。

オープニングから「ルグラン(注2)最後の映画(?)」とか、「ジャン・ルック・シ



ネマ・ゴダール」とか、エンディングでは「物語は三文小説のように終わる。今度はシネマスコープ、テクニカラーで撮る」とふざけた解説が入って終わる。ゴダールのおチャラケシネマとして見てもおもしろい作品だ。

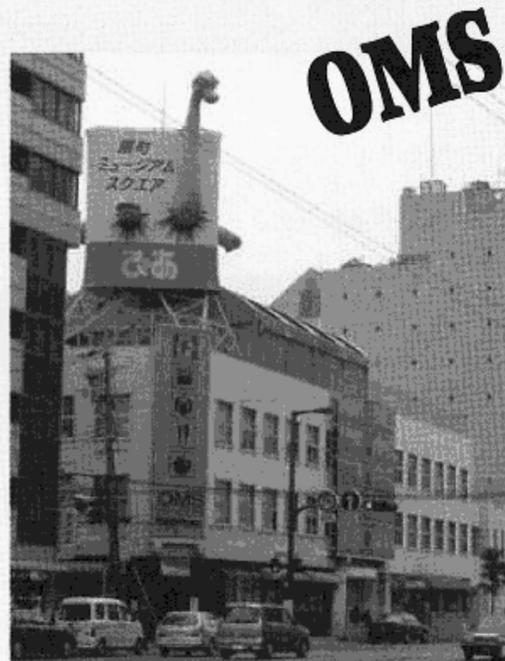
そして、その魅力を余すことなく発散させているのが僕らのミューズ=アンナ・カリナだった。いつもなら知性と神秘の女性が、この作品ではちょっとタリない女学生を演じ、悪人たちの計画に乗せられていく。タバコを吸うしぐさ、自転車をこぎながら、右折のときは右手を左折のときは左手を上げながら走っていく動作や表情など、彼女の一挙手一動がかわいく可憐なのだ。クダールのカメラワークが見事に冴える。

欲の張った叔父たちに計画を知られ、アルチュールは銃弾に倒れる。逃走の旅の道中にフランツはオディールに「人々は結びつこうとしない。バラバラではなればなれ

だ」と語りかけ映画は終わる。軽薄で分別なくワイルドに生きる青年たちを描き、洗練された言葉、知的な会話でまくし立てる常套手段は、まさにゴダールの独断場だ。今見ても、これまで見たこともない映像と思わせるほどに表現は新鮮で輝かしい。

OMSは、日本経済の絶頂期に開業し下降とともに2003年閉館した。この間、一般映画館では見られないフィルムを提供してくれた。いわゆる映画のアカデミックやプロパガンダではなく、ちょっとゆるいオルタナティブなフィルム選択が秀逸だった(左下写真)。そういえばOMSは、「はなればなれ」に出てくるようなおしゃれで古い建物だった。街頭のシンボルともいえる懐かしい風景が消え数年が経ってしまった。あんな映画館はもう二度と出会えないのだろうか。

hidarimaki



注1 扇町ミュージアムスクエア

1985年。大阪ガスの遊休不動産活用事業として「文化的発信基地/扇町ミュージアムスクエア」が開業した。小劇場の「フォーラム」、ミニシアター「コロキウム」、雑貨店、カフェレストラン、ギャラリーを備え、とくに「フォーラム」は大阪における演劇文化を支えた。2003年3月に18年の歴史を閉じた。左写真は当時のもの。現在は取り壊されている。

注2 ルグラン

ミッシェル・ルグラン。仏の作曲家、ピアニスト。「シエルプールの雨傘」「ロシュフォールの恋人たち」「男と女のいる舗道」など多くの映画音楽を手がけている。

